

国際ガラス史学会第15回大会

真道洋子

A Report on the XVth Congress of International Association for the History of Glass, New York Yoko SHINDO

大会概要

国際ガラス史学会 (AIHV, Association internationale pour l'histoire du verre) 第15回大会は、2001年10月15日から20日にかけて、New York の The Metropolitan Museum of Art (以下、MMA と略す) と The Corning Museum of Glass (以下、CMA と略す) を会場として開催された。この学会は、古代から現代に及ぶガラスの歴史に関わるあらゆる研究に関して、研究発表、情報交換などを目的に、通常、3年に一度の割合で大会が開催され、毎回100を越える研究発表が行われる。今回は、一般の研究発表に加え、とくに、イスラーム・ガラスと現代アメリカ・ガラスを二大テーマとして、研究発表が公募された。

テーマのひとつであるイスラーム・ガラスに関しては、MMA において2001年10月2日から2002年1月13日にかけて開催された Glass of the Sultans 展と呼応している。この特別展は、アメリカのCMA、MMA、およびヨーロッパの教会や諸博物館に保管されている珠玉のイスラーム・ガラスが一同に集められたこれまでにない大規模な展覧会である。

現代アメリカ・ガラスに関しては、結果的に研究発表は少なかったが、主催者のひとつであるCMAの母体である、Corning Glass Companyの後援で、ガラス製造のデモンストラーションやフェスティバルなどが行われた。

大会参加者は、アメリカ、ヨーロッパ、イスラエル、日本など20数カ国から集った。しかし、今回の大会に先立ち、New York の貿易センタービルが破壊されるという不幸な出来事に見舞われたため、参加者数が当初予定よりも減少し、研究発表数が103から71 (内、ポスター・セッション13名) に減り、最終的な全体参加者数も124名となり、通常の半分近くに落ち込んだ。

大会スケジュール

大会は、10月14日の13時よりMMAのUris Centerで登録手続きが開始され、当日15時より行われたMMAのGlass of the Sultans展に関連したStefano Carboni氏による講演会“From Desert Sand to Glittering: Glass Fit for a Sultan”が案内された。

10月15日は、8時半にMMAに集合し、近郊のThe Newark MuseumとMMAの分館であるThe Cloisters

の見学会が行われた。The Newark Museumでは、常設のEugene Schaeferの古代ガラスコレクションおよび美術館の収集によるヨーロッパおよびアメリカ・ガラスの展示に加え、Fire and Light 3,000 Years of Glass Artistry展が行われていた。The Cloistersは、川岸に南フランスから持ってこられた4つの修道院を合体させて復元しており、そこに、ガラスを含むMMA所蔵の中世美術が展示されている。ここで行われたマンハッタン島内にいることを忘れさせる長閑な環境の中でのレセプションは、これから始まる研究発表に先立ち、緊張する参加者の心を和ませるものであった。

10月16日は、MMAにおいて、10時20分からMMA館長Phillipe de Montebello氏の歓迎スピーチの後、学会長Jennifer Price氏によって開会が宣言され、セッションに移った。初日はイスラーム・ガラスに関する13の研究発表が行われた。研究発表の対象地域は、エジプト、シリア、ヨルダン、パレスティナ地域に及び、内容は発掘資料に基づく考古学的研究および博物館所蔵品の美術史的研究に加え、化学分析に基づく研究などが発表された。研究発表の後、18時よりGlass of the Sultans展の内覧会とレセプションが行われた。

10月17日は、午前中に希望する7つの小グループに分かれ、MMA内の古代ガラス、ヨーロッパ・ガラス、近現代ガラス、アメリカ・ガラス、化学分析に関する各部門、The Copper-Hewitt Museum、The Jewish Museumで見学会が行われ、各館の学芸員が解説を行った。午後は、14時からポスター・セッション、15時20分から4つの研究発表が行われた。ポスター・セッションには、日本から藤井慈子氏が“Iconographical study of the scene “Baiae” incised on Roman flasks”と題して発表を行い、欧米のローマ・ガラス研究者と議論を交わした。18時から、CMA Incorporated Galleryで“Glass behind the Iron Curtain: Czech design, 1948-78”のオープニング・レセプションに招待された。

10月18日は、学会手配のバスで、MMAからCMAに移動した。途中、Dorflinger Museumに立ち寄り、ガラス展示を見学した。Corning到着後は、CMAで開催されていたGlass Studio Festivalに参加、美術館の夜間観覧とレセプションが催された。

10月19日は、インドの伝統的なガラス製造に関わる発表が行われ、その後、2会場に分かれて研究発表が行われた。第1会場は、プレ・ローマおよびローマ・ガラス、第2会場が中世および近世ガラスに関するセッションであった。17時からは、CMG から現代ガラス作家に送られる Rakow 賞の2001年の受賞作品発表が行われ、大賞にはヴェニス在住の日本人ガラスデザイナー大平洋一氏の作品が輝き、注目を集めた。

10月20日も2会場に分かれ、第1会場がローマ・ガラス、第2会場が近世ガラスと極東ガラスに関するセッションが行われた。第2会場では、谷一尚氏が“The six-lobed glass cups of Tang Dyn: recently excavated in China”の発表を行った。以上で研究発表は終了し、15時40分から会長の Price 氏によって大会の総括が行われ、その後、ガラス・スタジオで吹きガラス製造のデモンストレーションが行われた。

10月21日は、学会手配のバスで、ニューヨークへ向かい、大会の幕を閉じた。

イスラーム・ガラスに関する研究発表と意義

次に、今回の大会における主要テーマのひとつであるイスラーム・ガラスに関する研究発表について取り上げ、論評したい。

今回、MMA でイスラーム・ガラスの特別展が開催されていたが、これは、実物の展示と国際学会を同時に開催することで、昨今ガラス史の中で注目されてきているイスラーム・ガラスについて理解と議論を深めることを目的としていた。今回の大会主催者のひとりである MMA イスラーム美術部門の Carboni 氏は近年精力的にイスラーム・ガラスの研究を行っており、CMA の Whitehouse 氏とともに今回の Glass of the Sultans 展のカタログを作成し、さらに、クウェート国立博物館のイスラーム・ガラスのカタログも2001年に刊行している。また、Whitehouse 氏は、今回の展示およびカタログ作成の中心人物の一人であり、広くイスラーム・ガラスおよびローマ・ガラスを専門とされている。とくに、彼は、イスラーム考古学の草創期にイランでイスラーム時代の重要な港湾都市シーラーフの発掘調査を行っており、イスラーム考古学者としても名を知られている。

国際ガラス史学会大会は基本的に3年に一度行われ、今回で第15回を迎えたわけであるが、その歴史の中で、イスラーム・ガラスに関する研究発表が複数行われるようになったのは、Vienna で開催された第12回大会の頃からである。それまで、ローマまでの古代ガラスと近代以降のガラスに研究者が集中していた。この頃から、イスラーム考古学の進展とガラス史の中でのイスラーム・ガラスの重要

性が強く認識され、未研究の分野が多く残されていたことから研究数が徐々に増加していった。

このように、展示企画、大会実行委員会、研究者数の増加という三拍子がそろったところで今回のイスラーム・ガラスをテーマとした素晴らしい大会企画が実現したといえる。

イスラーム・ガラス関連の研究発表は初日に集中して行われた。タイトルの一覧を示すと以下の通りである。

FOY, Danièle, Maurice PICON et Michèle VICHY
“Verres omeyyades et abbassides d’origine égyptienne: les témoignages de l’archéologie et de l’archéométrie”

MOSSAKOWSKA-GAUBERT, Maria “Les objets en verre trouvés dans les tombeaux d’époque fatimide (Deir el Naqlun-égypte)”

HENDERSON, Julian and Sean McLOUGHLIN “Glass production in Islamic al-Raqqa on the Euphrates: changes in technology over time based on the chemical analysis of glass from early and middle Islamic sites.”

O’HEA, Margaret “One more river to cross: some problems in early Islamic glassware in Jordan”

DUSSART, Odile “Les verres islamiques de Qal’At Sem’an (Syrie de Nord)”

LESTER, Ayala “The Islamic glass finds from Tiberias”

POLLAK, Rachel “Early Islamic glass from Caesarea - a chronological and typological study”

SHINDO TAKAHASHI, Yoko “Islamic glass found from al-Raya site in Sinai”

WHITEHOUSE, David “Islamic cameo glass at The Corning Museum of Glass”

CARBONI, Stefano “The use of glass as architectural decoration in the Islamic world”

WARD, Rachel “Mamluk mosque lamps and the chronology of gilded and enamelled glass”

GIBSON, Melanie “A Syrian enamelled wine flask - was the patron a Christian or a Muslim”

EREMIN, Katherine and Ulrike AL-KHAMIS “Mamluk and pseudo-Mamluk glass in the National Museums of Scotland”

前半の発表は、発掘調査に基づく考古学的成果および化学分析に基づく成果に関するものであった。

Foy 氏は、7世紀半ばから9世紀後半にかけての地中海沿岸部の Maera, Fayyoun の Tebtynis、そして、Fustat の3遺跡の出土品を扱い、これらを22タイプに分類し、様

式と化学組成の点から論じた。この結果、ナトロン原料のソーダ石灰ガラスであり、Belus 河の砂で製作されたパレスティナの製品と比較し、エジプト製品がエジプトの砂を原料としていることを導きだした。一方、Henderson 氏は、シリア北部に位置する Raqqa の 9 世紀初頭の Tell Zujaj と 11 世紀の Tell Fukhkhar の 2 遺跡の出土品について、化学分析の結果に基づき成分、原材料、着色剤の観点から論じた。最終日に発表を行った Freestone 氏による紀元後 1 千年紀半ばのガラス原料の分析比較とともに、東地中海地域における初期イスラーム・ガラスの化学分析値は集積されてきており、今後、これらの総合的検討と議論が行われる土壌が整備されつつある。

考古学的研究発表は、Foy 氏と Mossakowska-Gaubert 氏がエジプト、Henderson 氏、O'hea 氏、Dussar 氏がシリアからヨルダンにかけて、Lester 氏、Pollak 氏がパレスティナ、真道がシナイ半島で実施された発掘に基づいて行われた。時代は、7 世紀から 11 世紀にかけて、とくにウマイヤ朝からアッバース朝時代に集中しており、相関関係を示す共通の出土遺物がそれぞれの発表の中で見られた。今後、これらの出土品と研究をリンクさせていくことで、初期イスラーム時代の東地中海地域をめぐるガラスの原料、技術、製品の流通の問題が明らかとされよう。今回は、研究者間の交流をさらに促進させる意味でも非常に有意義であった。

後半は、博物館に収蔵されている美術品資料を扱った、製作技法、図像解釈などの美術史的研究発表が主であった。したがって、ガラス研究者にとどまらず、イスラーム美術研究者の発表が含まれており、イスラーム美術の中でガラスを考える視点を取り込まれていた。Carboni 氏は、ガラスをイスラーム建築との関連の中で論じた。Ward 氏、Gibson 氏、Eremin 氏による発表は、イスラームの中でも最も関心が高いエナメル彩ガラスに関する研究を行った。これらは、1995 年に大英博物館で開催された Gilded and Enamelled Glass from the Middle East と題したシンポジウムで、多角的なエナメル・ガラス研究が行われたが、その後そこからさらに研究を発展させた意欲的なものであった。

今回の、イスラーム・ガラスに関するセッションは、イ

スラーム・ガラス全般を扱ったものとしては最大規模で、ガラス史研究の中でイスラーム・ガラスが研究分野として確立し、今後の更なる発展の契機となるものとして位置付けられよう。しかし、あえて言えば、今回の大会ではアラブ系研究者の発表が含まれていなかったことが残念である。今後、アラブ的視点を研究の中に取り込んでいくことが、イスラーム・ガラスの深層理解のためにも必要であると考えられる。

この他に、イスラーム・セッション以外にも、プレ・ローマ、ローマ、近現代などの分野で、最新の研究発表が数多く行われた。これらのセッションに関しては、それぞれを専門分野とする別の参加者に報告を譲ることとしたい。

おわりに

CMA での学会を終えた一行は、学会手配のバスでニューヨークへ向かった。その帰路、マンハッタン島南部の対岸を通りかかったとき、バスに乗っていた大多数の参加者の視線が、一斉に、貿易センタービルがかつて存在していた地点に無言で向けられた。今回の大会に参加するにあたって、誰しもが抱いていた不安と決意、そして無事に終わった安堵感、そして、ともに大会を築き上げた連帯感など、諸々の想いがその沈黙の中に集約されていた。バスが最初の会場であった MMA に到着した時、すべての参加者が 2003 年 9 月にロンドンで開催される次期大会での再会を約して、笑顔で別れていった。

最後に、あくまで大会続行を決め、細心の配慮を払い、安全の中に大会を終了させた Stefano Carboni、Lisa Piloni、Jane Shade Spillman、David Whitehouse、Ashton-Drye Associates 諸氏、および、すべての大会関係者の献身的な努力に心から敬意を表したい。そして、研究的情熱を優先させ集ったすべての研究者が、今後のガラス史研究の中心的存在として、今後も活動されることを確信するのである。

今回の第 15 回大会研究発表に関しては、これまで学会が発行してきた紀要ではなく、Corning が発行する *The Journal of Glass Studies* に掲載される予定である。

真道洋子

中近東文化センター

Yoko SHINDO

The Middle Eastern Culture Center in Japan